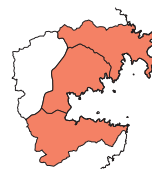


津波が結んだチリとの友情



▲2013年5月イースター島の人々の手で作られたモアイ像が南三陸町に贈られた。

写真提供 南三陸町観光協会

約17,000キロメートルの距離を越えて、南三陸町とチリは、友好関係を深めてきた。そのきっかけは、南三陸町で41名が犠牲となった1960（昭和35）年5月24日のチリ地震津波だった。この津波の記憶を未来に伝えようと、30年後の1990（平成2）年に国鳥コンドルの碑がチリから贈られ、1991（平成3）年には南三陸町がチリ人彫刻家に依頼して作ったイースター島のモアイが、志津川地区の松原公園に設置された。

震災直後の2011（平成23）年4月28日、チリ共和国パトリシオ・トーレス在日大使（当時）は自ら車を運転して南三陸町を訪問。志津川中学校に立ち寄って生徒や教職員にお菓子を贈り、同年6月1日にも再訪して生徒たちを励ました。また、2012（平成24）年3月30日にはセバスティアン・ピニェラ大統領（当時）が町を訪れ、新たなモアイ像の寄贈を約束した。東日本大震災で壊滅した町に新たなモアイ像を贈ろうと、日智経済委員会チリ国内委員会はイースター島の長老会に協力を求めた。

イースター島の石に彫られた、高さ3m重さ2tの巨大なモアイ像は、島外に出たことはない。2013（平成25）年5月に南三陸町に寄贈されたモアイが、史上初めて島外に出た貴重なモアイ像である。

「モアイ」は、イースター島のラパ・ヌイ語で「未来に生きる」という意味だ。未来に生きる南三陸町の人々を、遠い未来まで勇気づけ、見守り続けることだろう。